



監督＝荒戸源次郎／原作＝車谷長吉（文藝春秋刊）／脚本＝鈴木棟也／出演＝大西滝次郎／寺島しのぶ／大楠道代／内田裕也（赤目製作所配給／2003年日本映画／159分）

第58回毎日映画コンクール等で各賞を総ナメにした作品！ たしかに第27回日本アカデミー賞でも最優秀主演女優賞を獲得した寺島しのぶや新旧の役者たちの演技のすばらしさ、そして赤目四十八瀧を撮るカメラの美しさには脱帽。しかしタイトルどおり、「心中未遂」の旅への複雑な心理ドラマは結構難解で、観ていてしんどい面も……。果たして、どこまで「一般受け」しているのか……？

✿ 原作者、車谷長吉と監督、荒戸源次郎

この映画の原作は車谷長吉氏の『赤目四十八瀧心中未遂』（文藝春秋刊）。この本が単行本として世に出たのは、平成10年1月。そしてこの作品が第119回直木賞を受賞したのは、平成10年7月。しかし残念ながら、私はこの原作を読んでいない。したがって、「原作の方がいいか？ それとも映画の方がいいか？」という、よくある「論争」に参加することはできない。しかしパンフレットの中で、原作者の車谷氏は、「私が書いた小説『赤目四十八瀧心中未遂』（文藝春秋刊）より凄いと思うたのが、まず偽らざる私の感想だった」と書き、他方、荒戸監督は、「車谷さんの条件はたった一つ、映画の題名も『赤目四十八瀧心中未遂』にということだけで、お好きにどうぞと仰った。こんな原作者は初めてだよ。だから車谷さんには脚本も読んでいただいておりません。黙って五年待ってくれたんだからね。文士はかくも潔いのかと今でも感服してる」と述べている。

一方、原作者の車谷氏が、「私の分身である生島与一を演じて下さった大西滝

次郎さんは、私の疎外感を十分に表現して下さり、嬉しかった」とパンフレットに書いてあることを読めば、この車谷氏という作家は、自分自身の体験としての疎外感を小説という形に表現した作家だということがわかる。また、同じくパンフレットの中で、荒戸監督自身が、この映画制作への思いを語っている文章を読めば、この原作の映画化への思いがいかに熱いものであったかということがわかる。

この『赤目四十八瀧心中未遂』の映画が、メジャー公開でないにもかかわらず、じわじわと評判を呼び、日本の映画賞を総ナメにしたのは、きっとこの中年オジさん(?) 2人の熱い思いが一致したからだろう。したがって、上記のようにお互いに送りあっている「エール」も、きっとお世辞ではなく、本音のもの。というより、おそらくこの2人は、そんな歯の浮いたようなお世辞を言えるタイプではない、と私は見たが果たして、どうだろうか……?

この映画の広告塔、寺島しのぶ

この映画を大ヒットさせる広告塔となったのは、白いワンピースを着た姿が印象的な寺島しのぶ。言うまでもなく一世を風靡した東映映画『緋牡丹博徒』シリーズで有名な藤純子(富司純子)の娘で、演劇を中心とした舞台での活躍ぶりは有名。私も1997年に観た『近松心中物語～それは恋』での彼女の演技のすばらしさは今でも目にやきついている。

その寺島しのぶが、原作を読んで、「映画化するときは是非私を使って下さい」とお願いしたほど、この作品や主人公、「綾」のパーソナリティに惚れ込んだとのことだ。母親ほどの美人ではないが(……失礼)、かえってその方がいろいろな役を演じられていいのでは……? それはともかく、背中一面の「かりようびんが迎陵頻伽」(人間の顔をした鳥)の刺青や、激しいセックスシーンなど、この映画が女優としての新境地を開いた作品になったことはまちがいないだろう。

ズブの新人、大西滝次郎

原作者車谷長吉の分身である複雑な青年、生島与一を演ずるのは、全くの新人、大西滝次郎。この映画で彼が要求されたのは、決してうまい演技ではなく、

生島与一になりきること、そして一途にまっすぐな演技をすることだったはずだ。そしてそのために最も大切なのは目。つまり目の輝きや、一途に見つめる目の集中力だ。この新人は、それを見事にクリアしている。寺島しのぶをはじめ、周りに芸達者な役者がいっぱいいるから、彼はシンプルなだけの演技で自分の存在感を示すことができるという「特権」があったとはいえ、この映画で主人公生島の姿やその生きザマを出し切ることは大変なこと。これからの活躍が楽しみだが、果たしてメジャーの世界でどうだろうか……？

映画を支える準主役の2人

寺島しのぶが毎日映画コンクールでの女優主演賞と第27回日本アカデミー賞での最優秀主演女優賞なら、大楠道代は毎日映画コンクールでの女優助演賞。そしてまた第27回日本アカデミー賞では『座頭市』で助演女優賞にノミネートされた、今どき貴重な「オバさん女優」だが、昔の大映映画では、安田道代として、『氷点』や『痴人の愛』などに出演していたレッキとした清純派(?)。

尼崎の下町でホルモン屋を営んでいる勢子ねえさんの役柄だが、一流大学を卒業しながら「こんなところ(尼崎)で、こんな仕事(ホルモンの串刺し)」をしている生島の「心の痛み」や「本性」を一目で見抜き、生島を包んでいくという、実に大きな存在感のある役。それを当然のことながら、表現力豊かに演じている。

もう1人の準主役は、刺青師の彫眉を演ずる「永遠のロックンローラー」、内田裕也。釜が崎を離れて、尼崎の駅に降り立った生島との思わせぶりな接触には思わずドッキリ。また、同じアパート内でのいろいろなやりとりやラストに向かう2人の心中(未遂)の旅の中で突如あらわれた、赤目四十八瀧での花見シーンなど、その出番も多い。私はあまり好きなキャラクターではないが、その奇妙な存在感は抜群。きっと、荒戸監督が大好きなキャラなんだろうと思う……。

「心中未遂」の意味は……？

原作を読んでいないし、パンフレットにも映画のストーリーが書かれていないため、映画のイメージはわかるものの、「心中未遂」の意味がわからないまま、

映画が始まった。上映時間は2時間39分と長いが、特別、大きな転換点があるわけではなく、淡々と主人公生島を中心とした、尼崎の下町での生活が描かれていく。

「心中未遂」の意味がわかり始めるのは、後半3分の1ぐらいになってから。ここでやっと、ヤクザとなっている綾の兄が3000万円のお金を使い込み、その穴埋めのために、妹の綾を売り飛ばす。しかし綾はこれを拒否し、逃げ出していく。それに巻き込まれる（付き合う）のが生島、という筋書きが明確になってくるわけだ。したがってそれまでの時間は、生島や綾の人物像と勢子姉さんや彫眉の人物像をじっくりとほり下げて描く作業に費やされている。そして心中……？ いや心中未遂……？ そして最後にスクリーンには「合掌」の文字が……。その意味や、そこからどう考えるかは、映画を観ている人それぞれのお楽しみだ……？

ちょっと変わった上映方式

平成16年4月17日付毎日新聞は、「口コミ味方に上映50館越す」との見出しで、この『赤目四十八瀧心中未遂』を取り上げている。「この映画は、03年秋近鉄アート館などで短期間上映されたが、関西での本格的な上映は約半年遅れとなった」「変則的な上映方法は、既存の映画制作、公開システムに対抗し続けてきた荒戸源次郎（57）の方針のため」と書かれている。

このような上映方法がどこまで意図的なものかは知らないが、日本でも、メジャーな映画館で上映してもらうためにはとにかく宣伝が必要だし、製作段階からさまざまな制約があるのは当然。ハリウッド映画になると、それにはもっとすごいものがあるはず。その意味で荒戸監督がとった、この上映方法は独特なものだが、それが成功したのは、きっと荒戸監督の力が認められてきたことによるのだろう。もっとも、私のように口コミの中でわざわざ出かけて行った観客もいるのだから、その上映方法は大成功……？

第七藝術劇場と十三のまち

「ナナゲイ」こと第七藝術劇場は、阪急電車の十^{じゅうそう}三駅の西にある、いわゆるマイナー系のミニシアターとして昔から有名だが、私は今まで行ったことがなかつ

た。大阪市西区の地下鉄九条駅にある「シネ・ヌーヴォ」の会員になっていると300円引きとされていることからわかるとおり、お互い横の連携があり、映画についての「志」を共通にしている映画館。それにしてもあの「十三のまち」の中にあるとは……？ といっても、私は十三のまちが嫌いなわけではなく、あの雑然とした「庶民的(?)」な雰囲気はむしろ大好き。有名な、山本の「ネギ焼き」などはいつもおみやげをねだっているほどだ。

また、十三には私が何回も行ったことがある場所がいくつかある。その第1は私の顧問会社である希学園。かつての浜学園 VS. 希学園の営業禁止の仮処分を中心とした大「戦争」は本当に大変だった。そして今は、毎年の株主総会のたびに、その本社のある十三のまちへ通っている。第2はさかえまち商店街にある、1軒の寿司屋。ここは「ある女性」との待ち合わせの際にいつも利用していたところで、今回わかったことは、何とこの寿司屋のすぐ斜め向かいに「ナナゲイ」があったこと。これなら、これからも行きやすい……？ そして第3は……？ これはちょっとマル秘。毎年夏に開催される淀川の花火大会の時に、大繁盛する業界だが……？

それはともかく、このナナゲイのような個性的で意欲的な映画館の経営がきちんと維持され、今後ますます発展していくことを願いたいものだ。

パンフレットは難しすぎるのでは……？

パンフレットは1冊1000円だが、大版で分厚く、写真もきれい。そしてその内容も充実している……？ と言えば、いいことづくめ。しかし、「難点(?)」は、こんな難しい内容のパンフレットも珍しいのでは、と思うほど難解なこと。私が読んでも難しいのだから、若い人にはちょっと手に負えないのでは……と思う。

私が思うに、原作者の車谷長吉氏がちょっとヒネクレ者(?)なら、監督の荒戸源次郎氏はちょっと変わり者(?) (……失礼)。パンフレットには、その原作者自身の文章と監督のインタビューが載っているが、まずここで書かれていることが難しい。そりゃ、原作者が「私の疎外感を十分に表現してもらった」と語る、人間の「疎外感」という言葉は、かつての「はやり言葉」だが、ずいぶん

「哲学的」で難解な概念。その難解な概念や人物像をメインに描いた原作であり、またそれをかなり忠実に映画化した映画だから、そのアピールしようとするものが難しいのは当然か……？

しかしこのパンフレットでは、その上に、最初の上野昂志氏の『赤目四十八瀧心中未遂』解説が、また難しい単語を散りばめた、難解な文章。そしてパンフレットの中ほどにある、① 羅浮山房の御主人の「赤目・小太郎頌」、② 浦沢義雄氏の「捕虫網の荒戸さん」、③ 白石一文氏の「精神の孤独」、④ 阪本順治監督の「秘密の映画」も、それぞれの思いは十分伝わってくるものの、その文章はすごく難解で、私が読んでいても「ウン」とうなりたくなるほど。これはちょっと工夫した方がいいのでは？ と思わず、大きなお世話をしたくなってしまうが……？

もっとも、綾を演じた寺島しのぶの文章だけは、率直でわかりやすく好感がもてるもの。やはりどうも、私は女に甘く、男とりわけ同世代の男には厳しいのかな……？

2004(平成16)年4月30日記

ミニコラム

「心中モノ」あれこれ

「心中モノ」の古典はいうまでもなく、近松門左衛門が書いた浄瑠璃の世界。亀屋忠兵衛と遊女梅川との恋は結ばれず、心中に至るからこそ、今日まで語りつがれる名作となっている。『近松心中物語—それは恋』は、1997年9月、秋元松代脚本、蜷川幸雄演出によって近鉄劇場で上演されたが、2人の逃避行の到着場所は奈良県橿原市新口町。これはなぜか、『赤目四十八瀧心中未遂』での2人の心中場所とな

る近鉄大阪線の「赤目口」駅と同じ近鉄沿線の駅……？

他方、現代版「心中モノ」の代表はあの渡辺淳一原作の『失樂園』で、役所広司・黒木瞳コンビの映画(97年)をはじめテレビ版、果てはZARDが歌う『永遠』まで大ヒットした。もちろん、この2つとも心中は既遂。これに対して、『赤目四十八瀧心中未遂』は……？